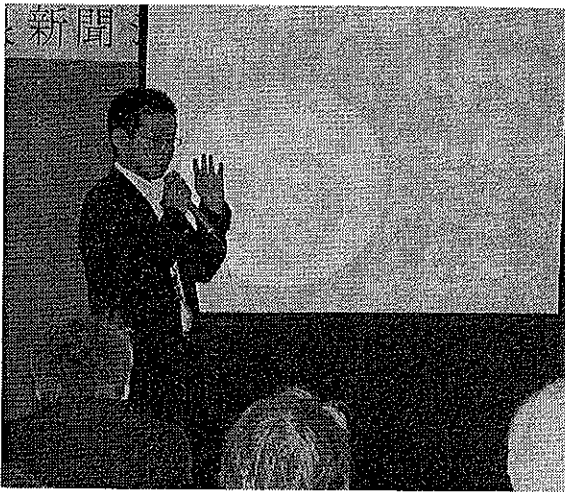


# 認知症 診断で早期発見を

## 患者支援の方法探る

奈良新聞社が本社移転を「アクラフセミナー」の第二回「もつと認知症を知ろう」が二十八日、奈良市員限定企画「奈良新聞シニア法華寺町の同社で催され、



認知症への理解を深めてもらおうと行われた認知症サポーター養成講座。28日、奈良市法華寺町の奈良新聞社本社

会員約五十人が参加した。今回は、講師に御所市の鴻池会地域ケアセンターの大杉毅センター長を招き、全国キャラバン・メイト連絡協議会が展開する「認知症サポーター養成講座」として開催された。同講座の講師資格をもつ大杉さんが、認知症患者とその家族のドキュメント映像も交えて講義した。

大杉さんは認知症の症状には、記憶障害、理解・判断力の障害といった「中核障害」と、幻覚・妄想やうつ、興奮・暴力といった「周辺症状」があり、脳の細胞死により起きる中核障害に対し、周辺症状は、中核症状に患者本人の性格・素質や環境・心理状態が影響して起こると解説。「負けず嫌いの人は興奮状態になりやすい。ストレスなく生きてきた人は周辺症状が出にくい傾向で、周辺症状は本人の性格が大きく影響する」「周囲のかかわり方によって周辺症状の出方が違

う」と話した。

また早期発見・治療の重要性を強調。「必ず診断を受けて適切な処置を受け、周囲も適切にかかわることが大切」「診断後はどのような症状が出るかを医師から具体的に聞いておくことで、本人も家族も適切な対応ができる」と話した。

最後に認知症サポーターの証であるオレンジ色のゴミ製フレット「オレンジリング」が配られ、大杉さんは「何か特別なことをしなくてもよく、認知症を理解し、認知症の人と家族を温かい目で見守ってほしい」と呼び掛けた。

第三回は、十一月二十六

日午後二時からわかき法律事務所所属の西田正秀弁護士の講演「知っておきたいシニアの法律」。参加費は千円。問い合わせは奈良新聞シニアクラブ事務局、電話0742(32)2114。